

鎮宅靈符神信仰研究史の整理

著者	山極 哲平
雑誌名	國文學
巻	91
ページ	143-153
発行年	2007-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/1266

鎮宅靈符神信仰研究史の整理

山極 哲平

鎮宅靈符神とは

近世における「鎮宅靈符」の解釈
— 若干の文献紹介を兼ねて —

「鎮宅靈符神」とは、端的にその名が示しているように「靈符」を司る神である。「靈符」とは「靈験あらたかな護符」のことで、世界各地に現在でもいきづいていいる。鎮宅靈符神はこの靈符の中でも特に「鎮宅靈符」という、七十二種をセットとする特定の靈符と密接に関係し、玄天上帝、太乙神、妙見菩薩や国常立命等諸神仏と習合しながら、中国より日本へ渡り花開いた神である。文脈により種々の呼称が存在するが、「鎮宅靈符神」という呼び方が最もよくその職能を表しており、またその他の名称には特定の宗教的意味合いが含まれることもあるため、本稿では専ら「鎮宅靈符神」を採用することにする。

近世における「鎮宅靈符」に関する文献はその殆どが宗教儀礼実践書としての性格を有している。したがって、「研究書」として提示することにはいささかのためらいがあるが、中江藤樹『靈符疑解』⁽¹⁾、出雲路十念寺澤了『鎮宅靈符縁起集説』⁽²⁾と、明弘宗『太上神仙鎮宅靈符考』⁽³⁾、及び瓦谷山人『北辰鎮宅靈符弁』⁽⁴⁾をあげておきたい。

「鎮宅靈符」についてまず論じたのは江戸初期の儒学者、中江藤樹であった。藤樹は『靈符疑解』の中で、質問者の間に藤樹が応答する形で「鎮宅靈符」に対する儒者としての藤樹の解釈を説いている。それによれば、「七十二道の符は即ち六十四

卦なり。(中略)悉く是易卦の法象にして、一毫の錯雜無し」と述べ、易の理論によつて「鎮宅靈符」を読み解こうとした。さらに諸々の儒書は「皆易に本づく」、故に「易卦の法象」たる「鎮宅靈符」を「儒者の敬事する所のものなるを知るべきなり」とし、儒者が「鎮宅靈符」を祭ることを正当化しているのである。ところで、質問者の態度は一貫して「『中庸』に曰く、鬼神の徳為るは其れ盛んなるかな。之を視れども見えぬ、之を聴けども聞こえず。物に体して遺すべからずと。此の如くなれば則ち上帝鬼神は形色無かるべし。而るに其の形を書画するは迂にして誣ならざらんや」と劉氏伝授の事、⁽⁵⁾怪誕に渉る。如何とといった表現から窺えるように、「靈符」を祭ることに対し懷疑的に設定されている。「怪力乱心を語ら」ない儒学の流れとしては、これは当然のことのようにも思われる。

これに対し藤樹は「異端・曲学・権謀・術数、悉く皆吾が儒に出でざるなし。吾が儒に出づと雖も而も其の正氣を失い其の真に迷う。(中略)異端・曲学・権謀・術数の言と雖も、我を以つて彼を用うれば、則ち猶お益有り」と述べ、持論と相容れない靈符解釈を痛烈に批判するとともに、持論の正しさを強く訴え、靈符祭祀を勧めている。

興味深いのは、藤樹は「靈像を以つて福を祈り禍を避くるの

術と為すは、后世伝者の誤れるのみ」とし、現世利益を願うが為に靈符を祭る、といった最も素朴な信仰形態を退けている点である。藤樹は「靈像奉行の本旨は報本を以つて主と為して、而して福を受くること之に従う。」「譬えば、孝は本と親に報ゆるの行なり。何ぞ靈感を求めんか。然れども、孝心誠有れば則ち古今の靈応歴々なるを見るべし」と述べ、靈験などというものはそのを目的として求めるようなものではなく、日々を正しく生きることの後から付加的についてくるのだ、というのである。

澤了の『鎮宅靈符縁起集説』は乾坤二巻からなる「鎮宅靈符」の総解説書とでも言うべきもので、「第一、化現次第大意」から「第四十三、靈符七十二道之解釈」まで四十三の項目があげられ、『七仏所説神咒經』『漢書』『白氏文集』『史記』『抱朴子』等の諸書を引きながら靈符に関する縁起、伝来、妙見菩薩、星辰信仰等あらゆる事柄を集説している。板式に二種あり、上下合冊本と二冊本である。二冊本は奥付に「撰州西郡大坂天満天神社内 靈符社頭 神原河内介 (花押)」とある。これは後に触れる天満宮靈符社の勤番、神原河内介が再版したものである。

澤了の人物像は定かではないが、靈符祭祀の儀式次第として

「用儒者行法次第」「用神道行法次第」「唐様鎮宅次第」「吾朝習合次第」等諸流の修法が解説され、さらには七十二道の靈符も図示されている。本書の性格は下巻のはじめに「尊星行法ノ義ハ師伝無テハ適ハザル事ナレドモ、仰信ノ門弟ニ知セン為ニ昔ヨリ儒仏神ノ行者是ヲ執行スルノ行法ヲ左ニ出スモノナリ」とあり、また跋文に「神トハ天地元氣万物ノ靈性、衆生ノ本心ナリ。又衆生ヲ養ノミチハ亦是元氣ノ用也。故ニ万物ヲメグムヲ神トシ聖トス。正直ノ者ハ神ノ宿社ナリ」とあるように、鎮宅靈符神の祭祀を広め信仰の確立を促そうとするものだといえよう。

さて、この『鎮宅靈符縁起集説』は後の靈符信仰、靈符研究に多大な影響を与えた。たとえば後述する瓦谷山人の『鎮宅靈符弁』や明弘宗の『鎮宅靈符考』などにはこの『鎮宅靈符縁起集説』を参照した形跡があるし、武蔵州中藤村で活躍していた陰陽師の子孫である指田家にはこの『鎮宅靈符縁起集説』の抜き書きが残されている。特定の地域や社寺の個別的信仰に限定されることなく、幅広く「鎮宅靈符」を扱ったことで、普遍性の高い鎮宅靈符神信仰像を提示したと言えよう。

次に『太上神仙鎮宅靈符考』であるが、これは赤城峰靈符山

太陽寺を中興した弘宗禪師の書である。『太上神仙鎮宅靈符考』、並びに後の同寺の住職甫童が文化五年に刊行した『靈符縁起修法伝』⁽⁶⁾によれば、当地は唐天台山より赤山権現が飛来した靈地で、聖徳太子が一刀三礼して彫刻した鎮宅靈符神を本尊として祭っていたが後に荒廃。その後、弘宗の夢に一人の翁が現れ、禪師を当地へと導いた。そして禪師は大用禪師から伝教大師縁の靈符法、および靈符曼荼羅を伝授され、太陽寺を拠点に鎮宅靈符神信仰を広めたという。

本書の内容は『鎮宅靈符縁起集説』のそれを大きく出るものではないが、禪師が特に天台宗と縁が深かったため、赤山権現や日吉七社を靈符神と団体視したり、伝教大師相伝の記にある十五徳が鎮宅靈符の七十二の功德の中に全て含まれるとするなど、台密に寄った理解を示している。禪師が伝授された法も靈符講式を行う等類例を見ないものであり、天台流の法式であった「本朝三家の修法（神・儒・仏）」とは異なる点を強調し差別化を図っている。また「大用は五流の規則を超出して靈符の本位を坐断し、禪門別伝の旨を得て以って修心三昧を証す」「一念は無念を以つて要と為す。是靈符の本位なり。無念なるときは則ち三世不可得なり。不可得の心、之を靈符の安心三昧と曰う」とあり、禪門での靈符祭祀を正当化し、靈符の本位を無念

無想の安心三昧の境地であると位置づけている。

最後に『北辰鎮宅靈符弁』であるが、これは所謂「玄学」から鎮宅靈符を弁じたものだと言える。著者の瓦谷山人の詳細は不明だが、その著作には『奇門遁甲国字解』『玄学觸』『純陽帝君仙派系図』と言った書名が見られ、また、『鎮宅靈符弁』の中にも『列仙伝』『雲笈七籤』『抱朴子』『大洞紫陽宝籙』『神仙鑑』等多数の道教、神仙道関連書からの引用が見られる。同書中では

「夫儒卜釈道卜三ノ教ハ源一本ニシテ偏ナラズ。(中略)余、固ヨリ性不敏ナリトイヘドモ深ク三教同源ニ味ハヒ、経伝ニ耽リ道仏を貪リ」と記しており、さらに「本朝所立ノ神祇家モ同ク其本ヲ一ニシテ」と述べ、儒仏道神の一致を説いている。

また、「今此靈符弁ハ只鎮宅ノ謬誤ヲ訂正シ諸尊ノ名義ヲ論ズルノ記ニシテ」とあり、鎮宅靈符が世間において誤解されている点を改めることを目的として書かれたことがわかる。具体的には「北辰君ヲ朝礼シ、靈符秘文ヲ祭ラント欲スル者、宜シク孝悌忠恕ヲ先ンジテ、(中略)正心誠意ヲ柱礎トスベシ」とあり、靈符の靈験に動機付けられて北斗・靈符祭祀を行うのではなく、「孝悌忠恕」を本旨とすべきだと主張する。この点は藤樹の見解と通ずるものがあると言える。

また、当時鎮宅靈符神が妙見菩薩や太乙、真武神等種々の神仏と習合していた中で、「請ラクハ四方ノ初学士、能這般ヲ認メ得テ彼北辰ニ北斗ヲ分タズ。或ハ大乙天尊ヲ合セ一ニシ、又ハ真武帝君ヲ混ズルノ説、更ニ信ジ用ユルコトナカレ」と、世人が北辰北斗を混同し、星祭が即ち靈符祭祀だと考えているようだが、それは間違いであると述べる。

以上四冊は近世の靈符書の中でも著者の「鎮宅靈符」に対する独自の思想が見て取れるものであり、靈符信仰を考える上で意義深いものといえよう。

近代以降の鎮宅靈符神信仰研究史

鎮宅靈符神に関する研究は主として道教研究者によって為されてきた。しかし、諸学界の中でも比較的近代になって盛んになった道教研究における当初の眼目は、従来あまり言及されていなかった道教思想・道教文化が、実は一般に考えられている以上に深く日本文化に影響を与えていたことを明らかにする点にあり、したがって鎮宅靈符神信仰に限定して深く論じるという趣のものではなかった。

近代に入り鎮宅靈符神信仰についてまず言及したのは妻木直

良博士である。博士は「日本に於ける道教思想」と題した論文の中で、平安朝、並びに徳川時代の資料を主として用いながら、日本における道教の影響を考察されたが、その一つとして取り上げられたのが鎮宅靈符神信仰であった。博士は仏典の中に見える道教的要素を指摘し、「北斗の信仰と結んで妙見菩薩といえる人格神を作り、之に配するに道教流の護符即ち後世に伝える祝由科と同一の護符を列記せるもの、其の経とは即ち穢跡金剛靈要法門にして（中略）七仏所説経は妙見の功德を説き鎮宅靈符として後世陰陽家と混じ」と述べ、北斗神の仏教化されたものとして「鎮宅靈符神」が誕生したこと、近世には「鎮宅靈符」をめぐる信仰が盛んであったこと、現在でも京都の行願寺や曙寺（閑臥庵）などには鎮宅靈符神の尊像が祭られていること等、鎮宅靈符神信仰の概要を述べている。

本論文はその題名にあるように、道教思想という大きな括りの中で鎮宅靈符神信仰をとりあげたものであり、鎮宅靈符神信仰に限っていえば詳細な考究とは言えない。しかし、博士の研究の優れているのは、鎮宅靈符に限定せず、「祝由科」⁽⁷⁾『穢跡金剛靈要法門経』⁽⁸⁾『邪兇呪禁法則』⁽⁹⁾『靈印秘符』⁽¹⁰⁾『鎮宅靈符縁起集説』等の護符関連書を参照しながら、靈符文化の大まかな流れを描出しようとした点である。博士は先の諸書から符図を並べ

て揭示し、「次第に変遷し類化する如き中にも、一脈の貫通する所あるを見るべきである」と、時を経て符図が連続的に移り変わる中に一貫するものを見出そうとなされた。無論、靈符の種類自体が異なる上に、木簡資料等が加味されておらず、博士の示された「靈符図の遷移」モデルは今となってはかなり強引な示し方である感は拭えないものの、非常に意欲的な試みであったと言える。

妻木博士と同じく道教研究の立場から鎮宅靈符を扱ったのが、那波利貞博士「道教の日本国への流伝に就きて」である。博士はこの中で元禄十一年の『書言字考節用集』に「靈符本尊。所祭北斗祿尊星。故号星宮。神呪経。我北辰菩薩。名曰妙見。」という記述があることから、「元来道教の崇星信仰に基く星祭りの儀が、茲に仏教化され仏教的色彩を有する妙見菩薩として考へられて来て居ることが判知せられる」とし、更に『日本靈異記』『中右記』『拾遺都名所図絵』等諸書を引いて妙見・北斗祭祀の痕跡を明らかにされた。そして、「仏教化せられずして道教信仰のままに我が陰陽道に入りし北斗信仰は靈符神の信仰な」のであるとし、京都松原不動、並びに閑臥庵（曙寺）の靈符社をその例として取り上げている。

博士は閑臥庵に対しフィールドワークを実施されており、かなり具体的に実際の信仰の有様を記述している。特に閑臥庵では住持の岡田師に話を伺われ、当寺の由緒、授与されている霊符（筆者注・鎮宅霊符ではなく、十二支の霊符）、鎮宅霊符神像の詳細等が記されている。妻木博士が専ら文献学的見地から俯瞰的に霊符信仰、並びに霊符図を考察されたのに対し、那波博士は主として霊符神信仰の実相を論じられたと言える。

さて、鎮宅霊符神信仰に対し最も多大な功績を残されたのは、同じく道教学者の吉岡義豊博士「妙見信仰と道教の真武神」である。博士は鎮宅霊符の原典をめぐり、正統道蔵所収の道教經典『太上秘法鎮宅霊符』⁽¹⁾を発見された。さらに、博士所蔵の「霊符之秘伝」という天正年間の写本との詳細な比較を通し、道蔵本と天正写本の主文末尾に異同があることから、道蔵本、天正写本の基になった「原テキスト」が存在すると推定された。

さらに、真武神の聖降日と天正写本に記される霊符神の聖降日が同一であること、真武神の經典に記された像容と『阿婆縛抄』所収の妙見に関する記載が通じるものがあること、鎮宅霊符の七十二は真武神の本山、武当山が七十二峰から成る点で共通すること、両者とも星辰信仰を中核と為すこと等から、道教

の真武神が日本では妙見菩薩として受容された点を実証的に考察された。

これまでの研究が主として『鎮宅霊符縁起集説』を中心とする日本側の文献から北斗信仰と妙見菩薩の習合が説かれて来たのに対し、吉岡博士の研究は道教側の文献、並びに密教經典を用いて中国・日本双方向から、真武が如何にして妙見菩薩と習合し得たかを論証するものであり、非常に堅実であると言える。これにより真武⇨妙見⇨霊符神という構図はほぼ確定されたと言ってよい。

この吉岡博士の論文を批判的に検証されたのが、酒井忠夫博士「中国宗教文化（特に符呪文化）の日本への伝播と受容」であった。博士は論題にあるように、日本に伝来している中国式の符呪に着目し、道教学の観点から総論的に日本の霊符文化をとりあげられた。

今、鎮宅霊符に限定して博士の論をみると、吉岡博士の、原テキストから道蔵本、天正写本が分かれたとする説は「鉄案とはなり得ない」とされ、「元末明初ころまでに作られた道蔵本が、三教の經典とともに室町前半期には日本に将来され、それを受容した日本の密教者、神道者などによって天正写本が生ま

れたと考えた方が、日本文化史の流れからしても、より正確であると考えてよい」と主張された。

また、吉岡博士が道蔵本、天正写本ともに真武に触れていないのを、単に「積極的に表示していないだけである」とした点に対し、「符図自体は北斗北辰を客体とするものであり、亀蛇玄武・真武を客体としたものではない」と述べている。

「鎮宅靈符」に対する博士の構想をまとめれば、妙見菩薩の信仰を説く經典が平安初期に密教僧により將來され、平安後期に三井寺の尊星王法の隆盛があり、さらに日・朝・中文化交流の刺激を受け、まず『太上秘法鎮宅靈符』や『北斗經』⁽¹²⁾等が密教・神道者に受容された。続いて明代の真武信仰の影響により、先の『太上秘法鎮宅靈符』に日本の尊星王信仰や真武信仰が習合された『鎮宅靈符縁起集説』が編纂された、というものである。

博士の論点は二つあり、一つが鎮宅靈符伝来に関してであり、今一つが『太上秘法鎮宅靈符』における真武神の影響についてである。後者については確かに、道蔵本『太上秘法鎮宅靈符』が既に真武の影響を受けていたのだとすれば、その縁起を語る部分に真武の名が一度も出てこないのは、縁起の持つ機能を果たさないという点でいささかの疑問も残る。したがって酒

井博士の主張されるように、道蔵本の主文部位には真武の影響はないと考えるのが妥当のようにも思われる。

ただ、前者の伝来時期の特定について、酒井博士は「文化史的な流れ」という漠然としたものを根拠としており、道蔵本、天正写本の主文末尾に何ゆえ異同が生じたのかを解決するものではない。さらに言えば、たとえば閑臥庵の靈符神像が平安時代の天文博士安倍晴明の開眼だとする伝承があること、三井寺や滋賀の市神社には室町前半期頃とされる鎮宅靈符神の絹本着色の掛軸が伝存していること、また南北朝時代の武将である楠正成は鎮宅靈符神を信仰しており、「建武二年 乙亥正月九日 鎮宅之靈符 楠正成□」と鑄られた神鏡が、その子孫である食野家に伝わっていること、⁽¹³⁾さらに昭和四十八年九月十四日付の大阪版「毎日」読売二両紙には岸和田から「至道二（九九六）年歳次丙申」の年記のある銅板の靈符が発見されたという記事が掲載されていることなど、靈符信仰の伝来時期を考える上で看過できない状況がある。

このような道教を主流とする研究の一方で、郷土史・社史の方面からも鎮宅靈符神に対し照明があたりてきた。たとえば『枚岡市史』や郷土雑誌「ひらおか」などには滝川政次郎博士

が額田の地に建つ鎮宅靈符社について、近世に土御門家の祭儀に具官として奉仕した額田歴代組との関連から言及されている。筆者も近年この鎮宅靈符社の例祭を見学し、その折歴代組の末裔の方々が鎮宅靈符社についてまとめた資料を閲覧させて頂く機会に恵まれたが、共同体の絆を維持する村の鎮守として代々素朴に機能してきたことが感じられ、鎮宅靈符神信仰の一端を垣間見た気がした。

また、大阪天満宮にある靈符社について、同社の神職の日記や地誌を紐解きながら実証的にその実態を明らかにされたのは若林喜三郎博士「大坂天満宮内鎮宅靈符社史序説」であった。博士はまず大阪天満宮内に鎮宅靈符神が勧請された由来を明らかにされ、その後享保十三（一七二八）年に靈符神の開帳をめぐり神主対社家の衝突がおこり、靈符社が神主の屋敷神から、大阪天満宮大衆化の一翼を担うものになる契機となったことを描出された。

さらに、靈符社祭祀の実態に目を向け、天満宮当主滋岡家二代長祇が「靈符社之辺」に隠居し、鎮宅靈符神奉祭に献身したこと、長祇の死後、靈符社の祭祀は「勤番」と呼ばれる靈符社専任の神官に委任され、享和元（一八〇一）年には神原河内介が勤番に就任していることなどを明らかにされた。なお、河内

介は先に述べた『鎮宅靈符縁起集説』二冊本を再刊した人物である。

この「勤番」の地位について、若林博士は「神原河内介を神主と書くは当らず（中略）滋岡家同居の役介人也」という資料がある一方で、「天保八（一八三七）年頃、神原河内介が地主として、一ヶ月に銀一〇匁八分ずつの地子銀を受取っている資料がある」ことから、幕末期には一人前の神官であったと分析され、最後に天満宮近辺に「レイフ」と通称される遊里が存在していた点にも言及されている。

博士の研究は天満宮という、元来妙見菩薩や星神とは無縁であった場で鎮宅靈符神が受容された稀なケースを扱った点、宗教祭祀を執り行う神職の視点からその信仰を窺える点、そして何より鎮宅靈符神信仰の誕生・隆盛・衰退の実態を通時的に明らかにした点で示唆に富んだものであると言える。

以上、鎮宅靈符神信仰研究史上特に重要なものについて概観してきた。鎮宅靈符神信仰は、まず道教研究者によってその伝来時期の特定、関連経典である道藏本『太上秘法鎮宅靈符』の授受、真武神の影響を中心にこれまで論じられてきた。その一方で郷土史、社史の研究から、鎮宅靈符神が日本においてどの

ような形で信仰されていたのか、その具体的な様相が描写されている。ただ、靈符神信仰、および『太上秘法鎮宅靈符』伝来時期の特定については、先にあげた楠正成の靈符鏡や至道二年の銅板靈符等、物的資料の発見により今一度議論が必要となるであろう。

また、七十二道の靈符図を鑑みるに、なぜかくも道蔵本から崩れたのか、疑問の残るところである。無論伝写、大衆化される過程で次第に符図が崩れてきたと考えることは妥当であろう。しかし、同じく室町頃に将来されたとする『北斗経』の靈符図は、吉田や土御門で広く用いられたにもかかわらず、目だつて崩れているとは言えない。なるほど、確かに『北斗経』を原典とする靈符は『太上秘法鎮宅靈符』に比べれば、特権的宗教者により閉鎖的環境の中で相伝されてきたと言える。しかし、「鎮宅靈符」の場合、『鎮宅靈符縁起集説』と同様崩れた靈符図が、吉田神道などの特権的宗教者の間で秘伝書として閉鎖的に伝承されていたと推測される写本類の中にも見ることができるのである。このことは、道蔵本以外の鎮宅靈符関連書が日本へ伝来していたことを示している、と考えるのは飛躍のしすぎであろうか。

これに加えて、鎮宅靈符の符図には二、三の系統がある。こ

のような系統の差が、日本でおこつたものなのか、あるいは吉岡博士の言うように原テキストが大陸に既にあり、そこから分かれたものなのか、検討する必要があるだろう。その上で鎮宅靈符の伝来年代の特定は行われるべきではないだろうか。

また、郷土史・社史的研究に関して言えば、未整理・未発見の資料もあるだろう。たとえば国立歴史民俗博物館に収蔵されている吉川家文書は、奈良の鎮宅靈符神社と深く関係するものであるし、全国の資料館・図書館等にはこれまでの研究の中で用いられていない鎮宅靈符神関係の文献も多々ある。そうした文献を収集・検討し、これまで道教研究者が成してきた仕事と平行しながら、より多方面から鎮宅靈符神信仰の実際を描き出してゆく作業が必要であるといえよう。

〈鎮宅靈符神信仰関連文献目録〉

- ・「日本に於ける道教思想」妻木直良（『龍谷学報』三〇六・三〇八号 一九三三・一九三四 後に『選集 道教と日本』第一卷 雄山閣に収録）

- ・『密教占星法（上）』森田竜僊（高野山大学出版部 一九四二）
- ・「道教の日本国への流伝に就きて」那波利貞（『東方宗教』第二号、第四・五合併号 一九五二〜四 『選集 道教と日本』

第一卷 雄山閣に収録)

- ・「鎮宅靈符神儒法祭祀次第」(「ひらおか」八号 一九六〇)
 - ・「西ノ辻鎮座の鎮宅靈符社」滝川政次郎(『枚岡市史』第二卷 一九六六)
 - ・「妙見信仰と道教の真武神」吉岡義豊(『智山学報』14 一九六六)
 - ・「妙見信仰の系譜と展開」野村耀昌(『近代日本の法華仏教2』第一篇第二章第二節 一九六八)
 - ・「大乙神経序・靈符疑解に見える道教思想の受容」木村光徳(『藤樹学の成立に関する研究』一九六九)
 - ・「中国製の『鎮宅靈符』」(『毎日新聞』大阪版 一九七三九月一四日)
 - ・「北宋の銅板お守り」(『読売新聞』大阪版 一九七三年九月一四日)
 - ・『星占い星祭』金指正三(青蛙房 一九七四)
 - ・「鎮宅靈符」(『日本の道教遺跡』 一九八七)
 - ・「中国宗教文化(特に符呪文化)の日本への伝播と受容」酒井 忠夫(『日本・中国の宗教文化の研究』 一九八八)
 - ・「富藏妙見山―上神谷妙見―」小谷方明(『大阪春秋』六〇号 一九九〇)
 - ・「星田妙見宮散見」野崎敏生(『大阪春秋』六〇号 一九九〇)
 - ・「尊星王と鎮宅靈符神」泉武夫(『研究発表と座談会 三井寺の仏教美術』一九九〇)
 - ・「大坂天満宮内鎮宅靈符社史序説」若林喜三郎(『大阪天満宮史の研究 第二集』 一九九三)
 - ・「呪符と道教」坂出祥伸(『氣』と養生―道教の養生術と呪術』一九九三)
 - ・「南照寺の宗教活動」藤田定興(『近世修験道の地域的展開』岩田書院 一九九六)
 - ・「八代妙見の靈符」西田耕三(『東光原』二二号 一九九九)
 - ・「わが国における地鎮および宅鎮の儀礼・作法について」(『修験・陰陽道と社寺史料』一九九七)
 - ・「21世紀に遺る陰陽師集団の祭祀」秋山浩三(『大阪文化財研究』第二一号 二〇〇二)
- 注
- (1) 『藤樹先生全集』第一冊・卷三 岩波書店
- (2) 宝永五(一七〇八)年刊 関大・国会・東海学園・群馬大・早大等所蔵。なお、早川順三郎編『信仰叢書』、『神道体系』論説編・一六に翻刻

- (3) 寛延三（一七五〇）年刊 東大東洋文化研究所図書室所蔵
- (4) 寛政四（一七九二）年刊 東博・大谷・立正・礪川等所蔵
- (5) 漢の劉進平が神仙から伝授された鎮宅靈符を孝文帝に伝授するという靈符縁起のこと。
- (6) 文化五（一八〇八）年 玉川大学図書館所蔵
- (7) 「祝由科」は靈符を用いた医術。医科十三科の一つで、唐代の「呪禁科」に取って代わった。
- (8) 阿質達霰訳『穢跡金剛説神通大滿陀羅尼法術靈要門』『穢跡金剛禁百變法經』大正蔵 二一巻
- (9) 貞享元（一六八四）年刊 『近世文学資料類從 参考文献編一四』勉誠社に影印
- (10) 妻木博士の論文に詳細はないが、吉田神道で用いられた「神祇道靈符印」のことであろう。
- (11) 「正統道蔵」洞真部・神符類
- (12) 玄陽子徐道齡集註『太上玄靈北斗本命延真經註』「正統道蔵」洞真部・玉訣類
- (13) 「方除開運鎮宅靈符神縁起」一九三八年 閑臥庵発行
（やまぎわ てっぺい／本学大学院生）